

「水は蛍の運命 下田さんは 蛍の意志」

—吉野朔実『ジュリエットの卵』における女性
の自律—

鶴 田 尚 美*

要 旨

漫画家の吉野朔実は、多くの作品を通じて、自己と他者の差異の認識から生じる自己認識の問題について、いくつかの哲学的問いを提示した。本稿では、代表作のひとつである『ジュリエットの卵』の主人公、蛍を具体例とする。そして、(1) 伝統的なアリストテレスのフィリア論、(2) カント的な立場から、道徳的要請がもつ必然性とは異なる愛的要請について論じるフランクファート、(3) 同じくカント的な立場から、愛の本質を論じるヴェレマンの議論を参照し、蛍がいかにして他者を認識し、愛し、そして自律的な意志を形成していくのかを検討する。

キーワード：愛、自律、フランクファート、ヴェレマン

1 はじめに

本稿では、他者との出会いを契機とした女性の精神的自立について考えたい。そして、具体的な事例に即して分析を行うために、漫画『ジュリエットの卵』（吉野1988-1889）を題材とする。作者の吉野朔実（1959-2016）は、繊細な画風と内省的で文学的な台詞、そして冷静で分析的な物語構成を特徴とする作品群を描いた。また心理学に対して関心を持ち続け、とりわけ自己と他者の関係とにこだわり続けた。

初期の代表作『少年は荒野をめざす』（1985-1987）では、中学生の主人公、狩野都は、幼少期に失った兄を自己に投影し、女性であることを拒絶する。だが、彼女が小説で描いた理想そのままの少年が実在してしまったことにより、自己の存在理由に思い悩む。狩野は

* 京都女子大学 非常勤講師

「見てはいけない人を見てしまった。会ってはいけない人に会ってしまった。理想の自分がすでに他人として存在するならば、この自分は、自分にとって存在しなくてもいいものになってしまう。」¹（吉野1985-1987、第2巻、pp. 85-88）と心理的に追い詰められる。そして、一般に、吉野作品は思春期のアイデンティティ・クライシスを描くものだと解釈されている。

だが、吉野作品が提示するのはそういった心理学的な問いだけではなく、哲学的問いもまた含まれている。永井均は『マンガは哲学する』（永井2000、pp. 36-59）で吉野の『ECCENTRICS』（吉野1993-1994）²をとりあげているが、その分析は適切であるとは言い難い。この作品の主人公は、記憶喪失になった女子高生、結木千寿である。この作品について「じつを言えば、作品を構成しているこのような「私探し」ふうの問いは、真に哲学的な問いとは言えない。ここでの表現の仕方を使うなら、哲学的な問いはこうなるだろう。記憶を失って「私」ではなくなっても、なぜ私であることはできるのか、と。」と永井は述べる（永井2000、p. 38）。しかし、これは永井独自の〈私〉（すなわち、自分が他の人間ではなく、なぜ「このわたし」なのか）という視点からのみ生じる問いである。わたしには、千寿の抱える問いは「記憶を失っても、私は「結木千寿」と同一人物であるのか」という、ロック以来の人格の同一性（personal identity）の問いであると思われる。

さらに、永井は、この物語に登場する一卵性双生児、天と劫の提示する問いを理解していない。彼らは見分けがつかず、最初に出会った天と愛し合う千寿さえ二人を区別することはできない。双子たちは、この状態を望ましいと思っている。劫はこう語る。

「あんた達、身体がひとつしかなくて不安じゃないの？ どうやって自分をコントロールするの？ どうやって自分を確かめるの？ 主観は常にくもってる。自己評価は常に二割増し。誰もが、他人は自分を誤解していると考え。良くも悪くも自分を見ることができないってことが、ぼくらは理解できない。あんた達は、常に間違った自分を見ていることに恐怖はないの？」（吉野1993-1994、第2巻、pp. 143-145）

天と劫がそれぞれ別々の〈私〉であることは自明である。しかし、劫がここで示唆するのは、そういったことではない。自分自身をどうやって知るのか、自己と他者をどうやって識別できるのか、自分は本当に自分が信じている自分なのか、といった問いである。これはすなわち、自己知と自己理解といった哲学的問題である。わたしの見解では、これこそが吉野が追求し続けた真の問いである³。

『ジュリエットの卵』では、二卵性双生児⁴の兄妹を主人公に、彼らの関係の変化が描かれる。二人は18年間、自分たちだけの世界で

1 もともとの台詞に句読点はないが、読みやすさを考えて適宜挿入する。

2 この作品の原型は、短編「ライオンタンポポ」（吉野朔実『いたいけな瞳』第23話、集英社、1993）である。

3 また、中編『瞳子』では、「出来れば生まれてきたくなかったと思う」といった反出生主義（Anti-Natalism）の問題も示唆されている。（吉野朔実『瞳子』、小学館、2000、pp. 58-59）

4 すでに触れたが、一卵性双生児はアイデンティティ・クライシスを題材とする吉野が好んだキャラクターであり、いくつもの作品に現れる（『ジュリエットの卵』にも男性の一卵性双生児が登場する）。また、この頃、ピーター・グリーンウェイの『Zoo』（1985）や、ディヴィッド・クローネンバーグの『戦慄の絆』（1988）といった一卵性双生児を扱った映画が公開されたことも、映画好きな吉野に影響を与えただろうと推測される。実際、第3巻のメッセージで、吉野は「“今年は双子が大流行”だそうです。必修科目だと思って、映画はいろいろ見ましたが不幸になる話が多かったです。」と述べている。

生きてきたが、やがて彼らの関係は断絶することとなり、物語の終末で出生の秘密を知った兄は死を、それを知らぬままの妹は他者と生きる世界を選ぶ。そこで、いささか特殊な例ではあるが、この作品を題材として、アリストテレスおよび、ハリー・フランクファートとディヴィッド・ヴェレマンの愛に関する議論から、若い女性がいかにして他者と出会い、他者を愛し、自分の人生を自発的に構成していけるのかを論じたい。

2. 蛍と水

蛍は、染色を学ぶため金沢から千葉県的美術大学に進学した。彼女は『月下の一群』(1983-1984) から見られる、吉野作品のヒロインに典型的な特徴の、ふわふわとカールした細く長い髪の持ち主であり、さらに際立った美貌をもつ。そして、これも吉野作品のヒロインの典型であるが、蛍は内向的で控え目な性格をしている。その美貌が敬遠され、あるいは疎まれてきたため、自分の容姿を嫌っており、自己評価が低く、非社交的である。

蛍には二卵性双生児ではあるが瓜二つの容姿をした、兄の水^{みなと}がいる。水は母親に溺愛され、地元にとどまって金沢大学に進学した。彼の性格は物静かな蛍とは正反対で、女癖が悪く好戦的なトラブルメーカーである。蛍は「水は凶器よ。問題を起こすのが大好きなの。」(吉野1988-1989、第1巻、p. 140 以下、本作からの引用は巻数とページ数のみ表記する)と形容する。彼らの父が誰であるのかはわからない。蛍と同じ名前の母親の手によって二人は育てられた。

母親は水だけを愛し、蛍を愛さなかった。大学入学後にやっとできた二人の友人、小夏と夜貴子に蛍は言う。

「母はミナトを盲愛しているの。私を推薦でこちらの大学に入れたのも母よ。子供の頃から私をお菓子でつっておいて、ミナトだけつれて遊びに行ったわ。授業参観もミナトの方しか行かなかったわ。太るからってミナトには甘いものをほとんど与えなかったけれど、私の前歯はまっ黒だったわ。よく、こっそりチョコレートをわけてあげたけれど、バレたらしかられるのもミナトだったし、成績が上がってほめられるのもミナトだったわ。私はいつも、その隅で広告のウラにお絵かきしてたの。」(第1巻、p. 22)

こういった閉鎖的な環境の中で育った彼らは、二人だけの世界を作り、精神的に愛し合っている。「私達、24時間以上離れたことが無かったのよ。...水は恋人なの。私達、一生、二人で生きてゆこうって誓ったの。」(第1巻、pp.20-21)と蛍は説明する。彼らの母はこのことを知らない。とはいえ、二人の関係はキスを交わし抱き合って眠るにとどまり、性的な関係にはない。二人は近親相姦に対するタブー意識はもっている。「人でいる限り、俺達は淘汰される種なのか。ここまで万難をかいぐって生き残ってきた遺伝子が、俺と蛍で終わりになる。」と水は想いに耽る。ここでは、水の台詞とともに、「実らない果実。育たない種。不毛の大地。人故に、恋故に。かえらない卵。」⁵というモノローグが重なる(第

5 「実らない果実」「育たない種」「不毛の大地」「かえらない卵」は、いずれも生殖を示唆している。注14も参照されたい。

2巻、pp.84-86)。

さらに、蛍は「水が男の子だったから蛍は女の子なのよ。もし水が女なら蛍は男だったんだと思うし、それを疑った事はないわ。不思議に思うとすれば、それは私達が二つに割れて生まれた事よ。一人の間じゃなかった事よ」(第2巻、pp. 62-63)と言う。蛍のこの言葉は、二人に性的関係がないとはいえ、プラトン『饗宴』で語られるアンドロギュヌスを想起させる(プラトン、190-101、pp. 78-81)。こういったことから察するに、二人のセルフ・アイデンティティは未分化であり、また共依存の状態にあると言ってよいだろう。水と二人だけの閉ざされた状態で過ごしてきた蛍は、母親からの愛を受けられなかったこともあり、自尊心が低く、適切な感情を抱いたり表現したりすることができないように見える。さらに、二人の関係を見ても概して水がアクションを起こし、それに蛍が反応するという形が多く、蛍自身の実践理性や自発性はほとんど発揮されておらず、受動的な態度をとりがちであるように思われる。

3. 他者の存在

この作品で顕著に見られるのは、蛍の他者に対する特異な態度である。「いい機会だから他の男の子とつき合ってみたら？うちのクラスの連中も皆、蛍とお近づきになりたがってるわよ。」と言う夜貴子に対して蛍は「いらない。」と答える。「どうして？」と問われ、「汚いから。」と言う⁶(吉野1988-1999、第1巻、

p. 16)。その意識は強く、生理的嫌悪感を覚えた男性に対して蕁麻疹が出るほどである(水が他の女性と性的関係にあったと知った時も、水を目にすると蕁麻疹が出る)。

友人たちと別れ、ひとりになった時のモノローグで蛍は次のように語り涙ぐむ。「汚れているから、水のいない世界は醜いから、蛍は窒息しそうです。美しい空気を送ってください」(第1巻、p. 26)。

しかし、この直後、蛍は「日の丸」という名の犬とその飼い主である男性と出会う(図1)。ここで、初対面の彼を、蛍はしばし驚いたように黙って見つめ、そして微笑む。



図1 初対面の蛍と下田(第1巻、p. 35)

蛍は彼に心惹かれ、「——一瞬、きいてみようかと思っただけ。あなた、誰？ただ、それ

6 個人的には、蛍のこの感覚は非常によく理解できる。幼い頃、わたしにとって外的なものはすべて恐怖の対象であった。祖父の顔を見ても泣き、母が盲腸の手術で入院するため叔母に預けられた時も泣いたと言われてきた(神経質な子供が世界に対して抱く恐怖感については、吉野朔実「恐怖のおともだち」、『いたいけな瞳』、第15話、集英社、1992)を参照されたい)。そして、思春期に入ってから他人が怖く、とりわけ同世代の男性は汚いものと感じ、嫌悪の対象であった。

だけ。」(第1巻、pp. 38-40)と思う。やがて、彼がアパートの隣人で同じ大学の彫刻科に所属する下田游一であることを蛍は知る。下田もまた内向的で人見知りをする性格であり、寡黙でほとんど感情を顔に表さないが、温厚で多くの友人をもつ。徐々に蛍は下田に心を開き、二人は親しくなっていく。

誕生日に蛍へ会うために上京した水は、下田の存在が蛍に与える影響を危惧し、大学を休学して東京の大学を受験することを決意する。そして、水は蛍にこう言う。「... 蛍、おまえはいつも正しい。そうだ。離れているときっと悪い事が起る。俺達はいっしょにいなきゃだめだ。」(第1巻、pp. 116-117)

だが、夜貴子から広告モデルのアルバイトの話を持ちかけられたことによって、蛍の人生は大きく変わっていく。彼女が出演した広告は業界の人々の目にとまり、モデルの仕事が次々と舞い込んでくる。さらに、蛍と水が互いに愛し合う関係であることが母親に知られ、仕送りを止められる。これらの事情の結果として、蛍は大学を退学し、モデルとして生計を立てることを決意する。そして、その動機を夜貴子と小夏に蛍はこう説明する。「私、この顔キライなのね。母にそっくりなこの外見と名前で、いいことなんかひとつも無かった。でも、これがお金になるなら、モトを取ってこようかと思って。今までの^{マイナス} ^{プラス} ⁺に出来たら、人生が変わる。私は今、自分も周りも変わってゆくのがちょっと面白くて、それならいっその事、どこまで変ってゆける

のか、自分に何が出来るのか、やってみようと思って。もう... 帰る場所は無いから。」(第3巻、pp. 136-139)

自分と環境の変化に対する関心と、帰る場所はないという諦念から、蛍はモデルとして本格的な活動を始める。やがて、蛍にはマネージャー⁷がつくようになり、彼女は新しい仕事のためにダイエットをするよう命じる。

「蛍ちゃん、ヤセる事そのものだけが目的じゃないの。もっと自分に興味を持ちなさいという事なのよ。もっと自分を愛して、自分に自信を持ちなさい。自分のために綺麗になりなさい。」(第3巻、pp. 164-166)

この言葉によって、蛍は目を開かされる。これらの環境の変化が契機となって、蛍はこれまで疎ましく思っていた自分の容姿に対して肯定的な態度を取るようになり、自分自身の意志によって決定を下し、これまで潜在的でしかなかった能力を徐々に発揮するようになっていく。水の束縛に対しても決然とした態度をとるようになり、二人の共依存関係は崩れ始める。そして、下田とより親密になり、恋愛感情を抱くようになっていく。夜貴子や小夏、そして下田の友人たちは良くも悪くも蛍の美貌を称賛するが、下田は一度も彼女の外見を評価したことはない。表面的な美しさだけではなく、蛍自身に下田もまた惹かれていくのである⁸。

7 元モデルのこのマネージャーは、蛍の印象を尋ねられ「見かけは華奢なメレンゲ、でも中身は丈夫な大福。」と答えている。(第3巻p. 122)

8 しかし、下田は高校時代の美術教師、妙子へ恋心を抱き続けていた(蛍はこのことを知っている)。他方では、自分が女性であることを受け入れられない小夏が水と出会い、恋愛感情を抱くようになる。本稿では蛍にのみ焦点を絞るため、これらの関係は省略する。

4. 愛の本質は何か

4-1. アリストテレスのフィリア論

ここでいったん立ち止まり、蜚と下田の間で育まれていく愛について考えてみたい。アリストテレスによれば、愛 (philia) はひとつの徳、あるいは徳と切り離せないものである。そして、次のように述べる。

〔徳である〕のみならず、われわれの生活に対してこれほど欠くべからざるものはない。何びとも、実際、たとえ他のあらゆる善きものを所有する人であっても、親愛なひとびと (フィロイ) なくしては生きることを選ばないであろう。まことに、富裕なひとたち、国の支配的位置にあるひとたち、国の覇権を握るひとたちにとっても、親愛なひとびとの必要は絶大なものがあると考えられる。(アリストテレス、1155a、p. 65)

アリストテレスによると、愛には三種類ある。愛の対象となるのは、「善きもの」、「快適なもの」、「有用なもの」である。(アリストテレス、1155b、pp. 68-70) しかし、有用なものとは「それによって何らかの善またはなんらかの善または快樂が生ずるところのもの」であるのだから、それ自体目的 (telos) として愛されるべきものは、善きものと快適なものである⁹。愛する人と共に過ごす時、それに快樂を覚え、また互いの目に相手が善いものとして映るだろう。さらに、愛は相互的な好

意であり、互いに相手の好意を知っていなければならない。

そして、究極的な愛の性質は、「善き人たるかぎりにおける相手にとっての善」である (アリストテレス、1156b、pp. 72-73)。すなわち、相手にとっての善を、相手のために願うことである。しかしながら、こうした愛を得るためには、時を経て、昵懇を重ね、いわゆる「塩を一緒に食べた」¹⁰のちでなければならない。また、同じような点は、以下でも述べられる。

「親愛なひと」「友なるひと」というものは、「諸々の善ないし善とみられるところのものを、相手かたのために願いかつ行うひと」だとされるのであるし、また、「相手かたの存在と生を、相手かたのために願うところのひと」だとされる。(略) ないしまた、それは「一緒に時を過ごすひと」であり、「相手かたと意図を同じくするひと」であるとされ、或いは「相手かたと悩みや悦びを共にするひと」だとされる。(アリストテレス、1166a、p. 119)

アリストテレスのそもそもの目的は「善」を論じることである。したがって、善き人 (有徳な人) にとって、自分の愛する人もまた善を求める人である。そして、善き人にとっては同じものが苦痛であり、同じものが快適であるのだから、善の対象が時によって異なることはない。たとえば、正義は誰にとっても正義である。

しかしながら、現実のわたしたちを省みる

9 これは、フランクファートとヴェレマンもまた認める点である。自己利益に資するからという理由で相手を好むことは、その人を愛することと区別されなければならない。

10 本書の注によれば、「塩の一升も一緒に食べた上でなくては」といった意味である。

と、何を望ましいと思うかは人によってさまざまに異なりうる。それでも、上の引用のうち「相手かたと意図を同じくするひと」という点は、蛍と下田にも当てはまると言ってもよい。ある時、深夜に目を覚ました蛍は、月を見たいから散歩しようと水を誘うが、眠っている水は起きてくれない。ひとりで外へ出た蛍に、同じように外で月を見ていた下田が声をかける。そして蛍は「シモダさんも屋根のないところが好きなのね。」と答える。「彼〔水〕は？ついて来てもらえばいいのに。」と尋ねる下田に、蛍は答える。「ミナトはダメなの。虫の音が雑音にしか聞こえない人なの。目的がないと一歩も歩けないのよ。不思議でしょ？」そして蛍は「不思議ねえ...。」と続け、二人は無言で微笑んで見つめ合う（第1巻、pp.176-183）。また、物語の後半で、蛍と下田は、互いの将来の夢を語り合う。蛍は、生計を立てるためにモデルの仕事を選んだが、染色を続けたいという夢を捨てたわけではなかった。下田に対して、蛍は、山の中でハーブを育て、糸を染めて紡ぐ生活をしてみたいという願望を語る。そして、下田もまた、彫刻を続けていけば山で自給自足の生活を送ることになるだろうと答える。そして二人は共同生活を想像する。このように、彼らにはどこかしら類似した点がある。（第5巻、p. 68）

さて、アリストテレスは、続いて次のように述べる。

「よきひとにおいてはこういった諸相がごとく自分自身への関係において見出

されること、しかるに彼は友をみること自分自身をみるごとくである（すなわち友は『第二の自己 alter ego』）であるということに基づいて、「愛（フィリア）とは以上のような態度の何ものかであると考えられるにいたるのであり、また「親愛なるひと」「友なる人」とはこういった態度の見出されるようなひとにはほかならないと考えられるわけであろう（1166a 30 下線は鶴田が引いた）

しかし、わたしは他者に対して、下線部で述べられたような見方を取らない。確かに、愛する者にとって愛される者の幸不幸、喜怒哀楽は他の人間のそれよりも重要であり、また同じ思いを共有しようとすることもあるだろう。だが、そういった時であっても、事態の見え方は人によって異なる。わたしの目から見れば、身体と内面性ともに、他者は自分と絶対的に異なるものである。その異質性ゆえに他者は他者たりうる。他者を愛する時、自分との類似点だけを愛するのでは、突き詰めるとそれは自己愛と変わらないのではないだろうか。そして、本質的に異質な他者なくして自己は存在しえない¹¹。確かに、わたしたちは一般に、自分と本質的な価値観を共有する人を愛するだろうが、他人が自分とは異なる価値観を示し、異なる世界を見せてくれるがゆえに、相手を愛することもあるだろう。実際、水との関係しか知らなかった蛍の前に、初めて現れた他者が下田だった（図2）。蛍はここで次のように内省する。「この人はミナト

11 吉野のはちに描いた長編『恋愛的瞬間』で主人公の心理学者にこう語らせている。「光を知ってのはじめて闇を知る如く、人間は他人という光にあたってはじめて人になる。闇の中にひとりしているとしたら、自分が人間であるとしてどうして認識するのか。また大勢の中であって、他人と自己をどこで区別するのか。この時、最も美しく互いを照らし出す光、これを恋というのです。」（吉野朔実（1996-1997）、『恋愛的瞬間』、第1巻、p. 66）

とは違う。シモダさんは、爪の先まで他人なんだわ。蛍はずっと、他人^{ひと}に触^{けが}ったら汚れるような気がしてた。でも、触^{けが}ってみなければ、話してみなければ、何ひとつわからないんだわ。」(第3巻、pp.194-198)



図2 下田に恋愛感情を抱いていることを初めて自覚する蛍(画像は一部省略した)

将来の夢についての蛍と下田の会話も、また二人の差異性をあらわにする。一方で、下田は福岡の実家で野菜栽培に熱中し、犬猫にとどまらず兎や鳥などの動物を拾って飼育育てる子供時代を過ごした。それに対して蛍は「健康でうらやましい。シモダさんにはあたり前でも、蛍には、命はただつきるもの。」(第5巻、p. 71) とつぶやく。こういったネガティブな価値観に、それとは異なる人生のポジティブな側面を示してくれるがゆえに、下田は蛍にとってかけがえのない存在となるのである¹²。

4-2. 愛に関するフランクファートの議論

フランクファートはカント的な前提のもとで、アリストテレスとは異なる愛の側面を分析する。フランクファートによれば、カントが論じた道徳的義務のもつ必然性と、愛の必然性 (*necessities of love*) は異なる。愛の核心にあるのは、情緒的なものでも認知的なものでもなく、意志作用的 (*volitional*) なものである (Frankfurt 1999, p. 129)。すなわち、あるものに単に愛着を抱いたり、その価値を認知したりすることとは異なり、あるものを愛することにはその人の選好を形成し、行動を導いたり制限したりする安定した動機の構造がある。愛の対象はさまざまであり、自分の子供や他者、国、制度、あるいはより抽象的な、道徳的あるいは非道徳的な理想などがある。だが、社会正義、科学的真理、家族の伝統に対する愛よりも、愛の対象が特定の個人である場合に、しばしば情緒的濃淡や情熱が生まれる。

自愛の思慮 (*prudence*) や野心の要請は、単に条件つきだけでなく、偶然的である (Frankfurt 1999, p. 130)。これらを導く意図や必要は論理的に必然的ではない。すなわち、アприオリに真なわけでも普遍的なわけでもなく、個人的な思慮によって経験的に決定されるものでしかない。一般に、たいいていの人々は自愛の思慮や自己利益に対する関心をもっているだろうし、それらをもっている方が合理的だと言いうるかもしれないが、必然的にもたねばならないものではない。そ

12 クリスマスにサンタクロースの扮装をして幼稚園や保育園を回る下田のアルバイトに蛍も同行する。そして、仕事が終わった後に、「待っているだけではダメかもしれない。もう待たなくてもいいのかもしれない。」と心の中で思いつつ、下田にこう言う。「ミナトの事だけは手に取るようによくわかるし、ミナトだけは蛍から離れて行ったりしないと信じられる。でも、蛍はシモダさんがわからないけど、シモダさんを知らないけど、今ここにいるのがシモダさんで良かったと思ってる。だから、メリークリスマス。シモダさんに会えて良かった。」(第3巻、pp.93-95)。「シモダさんに会えて良かった。」という蛍の言葉は本作品の中で二回現れる (第5巻、pp. 75-76)。

して愛による要請 (the requirement of love) もまた、論理的な必然性をもつものではない。

しかしながら、偶然であるにもかかわらず、愛による要請は絶対的 (categorical) である。それらは自愛の思慮の偶然性とも、義務が要請する非人格的でアプリアリな要請とも異なる。そもそも、愛は、変えることができない個人的な環境に関わる事柄である。必然的な真理もアプリアリな原理もそこにはない。愛するものを愛される者に拘束するような制約もない。だが、愛に身を捧げることと、愛による命令とはしばしば無条件である。この点では義務の要請と類似しており、愛が命じるものもまた、厳として妥協を許さず、抜け道はなく、頼るべきものはない。

フランクファートが強調するのは、愛することの自律 (autonomy) である。彼によれば、人が自分自身を統治するのは、理性による命令だけではない。情念もまた理性同様に人を支配する (Frankfurt1999, p. 131)。そしてフランクファートは、行為者の自律性について、こう述べる。

ある人が自律的に行為するのは、彼の意志作用が自分の意志の本質的な性質から生じている場合のみである。カントによれば、ある人の意志作用は、彼が道徳法則の非人格的な命令に質素な方法で (austerely) 従う時に限って、この仕方ですべて彼の意志と関係している。しかしながら、実際、ある人が愛から行為する時にも、意志作用と意志には同じ関係がある。もちろん、愛は、典型的に個人的である。にもかかわらず、愛による命令は、カントが示唆したような、ある人の意志

の偶発的要素ではない。これらの要素は意志に統合されている。というのも、愛する人は彼の意志作用の本質の要素を限定しているからである。したがって、彼が愛から行為する時、彼の意志作用はまさに彼の意志の本質的な性質によってそうしているのである。このように、愛がもつ個人的な支配力は、カントが道徳法則の非人格的な制約によってのみ満たされうると信じた自律の条件を満たす。(Frankfurt1999, p. 132)

しかしながら、他方で情念は一般に「心の受動」と呼ばれ、そこに自律性は生じないという批判があるかもしれない。フランクファートによれば、ある人の意志が外的 (他律的な) な思慮に影響を受けており、それにもとづいて行為する場合、その人は受動的である。他方で、その人の意志それ自体が決定するのであるならば、その人は能動的である。ある人が誰かを愛する時、愛という情念に自ら服従することによって自律的となることは可能であり、その場合、この人は受動的ではない (Frankfurt1999, p. 133)。その人が、愛の対象が自分の利益になるからそれを得ようとする場合、その人は受動的である。しかし、愛は自己利益にもとづいている必要はない。さまざまな能動的愛は、それ自体で評価される。さらに、愛する人の主要な目的は、自分が利益を得ることではなく、愛される人に利益を与えることである。能動的な愛において、愛する人は愛される人を利他的に心づかい、愛される人の開花繁栄 (flourish) が彼にとっては重要である (Frankfurt1999, p. 135)。そして、この点で、愛する人は自由ではない。

彼は愛する人と自分の愛に魅了されており、その意志は、厳密に制限されている。また、愛は選択 (choice) の問題ではない。愛する人の意志が愛という感情に制限されているとしても、その抗いえない力は、わたしたちにとって相容れないものではない。

フランクファートによれば、愛する人に課される制約は、概念的あるいは論理的な分析によって決定できるものではない。(Frankfurt1999, p. 138) さらに、単に形式的なものではなく実質的なものである。これらの制約が関わるのは、ある人がもたざるをえない目的、選好やその他の個人的な性格特徴をもち、自分の意志の活動を効果的に決定することである。言い換えると、これらの制約は、彼が愛する人によって特定される。個人としてのわたしたちの基本的な性質は、わたしたちが関心をもたざるをえないものによって制約されるからである。愛のもつ必然性は、わたしたちの意志作用の境界を定める。これらの境界が意志作用の制限を定め、それによって、わたしたちの人格 (person) としての姿を描き出すものである。

これが意味するのは、愛は特定の仕方でも反省的であるということである。愛には、愛する人が特定の相手に対する意志的態度をとることが含意されているのだから、彼は自分自身に対してもそれに対応する意志的態度をとる。それゆえ、彼が愛する人に配慮する限り、彼は必然的に自分自身の行動にもまた配慮しなければならない。愛する人の幸福を理想的な目的として自分を捧げる時、愛する人はそれによって彼自身のこれに対応する理想を実現する努力に身を捧げる (Frankfurt 1999, p. 139)。たとえば愛する人が正義を理

想としているならば、自分もまた正義へと必然的に関心をもたねばならない。それを裏切ることは、自分自身を裏切ることとなるからである。フランクファートによると、わたしたちの心理的統一と非常に密接に関連したわたしたちの自尊心のために必要なものは、愛の命令がわたしたちに対してもつ権威 (authority) である。

4-3. ヴェレマンの愛に関する議論

さて、ヴェレマンもまた、カント的な前提のもとで愛を論じるが、フランクファートとは異なる点を指摘する。彼もまた、愛は単なる愛着 (attachment) ではないと述べる (Velleman2015, p. 42)。愛とは、能動的にいたわり優しく相手に配慮することであり、さらに動機づけの力をもつ。しかし、単なる博愛的な優しさや感情と愛は異なる。愛される人は、愛する人にとって何かしら特別 (special) な存在である。ヴェレマンもフランクファートと同じく、愛という感情は、愛される人の関心へと愛する人を導くものであり、相手の善への欲求を必然的に含意すると指摘する (Velleman2015, p. 44)。さらに、「相手の善」とは、その人が価値ある人であることを認識する限りで、価値ある存在としての彼女自身を保護したいと思うということを意味する。それでは、その価値とはどのようなものなのだろうか。しばしば言われるのは、性格特徴の好ましさや魅力的な外見などであろう。しかし、欠点のある人を愛することも珍しくはない。ヴェレマンの見解では、ある人をその人のもつ性質によって愛することは、その質 (quality) に対応する価値を与えることではない。それらの質は、相手のもつ価値のサイ

ンであり、その実質ではない。ヴェレマンはこう述べる。

わたしの見解では、人格として誰かの価値を認識することは、彼を愛することと区別されない。それは愛の評価的核心 (the evaluative core of love) である。愛される人が目的として究極的な価値をもつことから愛は価値判断であると言いたいわけではない。むしろ愛は、そのような価値の知覚に対する評価的反応である。そして、「知覚 (perception)」は文字通りの意味である。わたしたちが愛する人々は、周りに数多といる人々の中に人格を知覚することができる人たちである。たまにしか、この群衆の中に、鮮明に顔を見たり、声を聞いたり、自己認識をもつ自律的な他者—わたしたちのような自分自身にとって自己である人格—の内的現存による生き生きとした接触を感じることはない。〔略〕わたしの見解では、他の人格の鮮やかに知覚されたリアリティが与えるセンス・オブ・ワンダー (a sense of wonder) が愛の本質である。

(Velleman2015, pp. 47-48 下線部は原文イタリック)

ヴェレマンによると、愛とはこのような鮮明な知覚を伴う感情であり、それゆえに愛する人を特別なものとする。

ここで、上の二人の議論を踏まえて、蛍と下田の関係に話を戻そう。蛍は、初めて下田と会った時、黙って彼の顔を見つめていた (図3)。

その時の印象を彼にこう語る。「はじめてシモダさんに会った時ね、ちょっとドキっとしたの。あっ、男の人だ…。意識したの。」(第2巻、p. 149) ここで重要なのは、男性に対して「汚い」という意識を抱いていた蛍が、下田に対してそうは感じなかったことである。初対面の時点から、蛍にとっての下田は、他の人々とは異質な存在であり、蛍は下田に対して特別な感覚、すなわちヴェレマンのいう「センス・オブ・ワンダー」を抱いていたのである。そういった感覚を抱くことのできる初めての他者が下田であったことには、フランクファートが指摘した愛の必然性があるように思われる。そして、親しくなるにつれ、

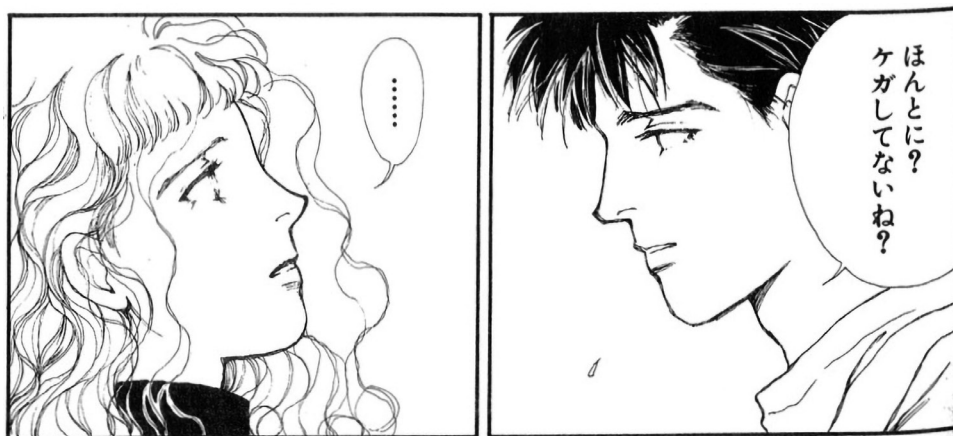


図3 下田を見つめる蛍 (第1巻、p. 33)

下田に対する好感は増していく。

それまでの蛍が知っていた他者は、容貌の美しさだけを褒め称えたりそれを妬んだりする人々¹³や、蛍を自分のレプリカとしか見てくれない母親、そして狂気じみた愛情によって自分を束縛する水しかいなかった。しかし、下田との出会いによって、初めてありのままの自分を受容し彼女自身を気づかせてくれる他者と蛍は出会った。蛍が喜ぶ時も悲しむ時も怒りをぶつける時も、下田は常に冷静にそれを受けとめる。そういった自分自身が受容される経験を、蛍は欲していたのではないだろうかと思われるのである。

当初はただ美しいだけでほとんど感情を表さなかった蛍は、しだいに笑い、泣き、時には下田のために行動し、そういった自分の変化を面白いとさえ自覚するようになる。また、二人はしばしば草原で共に時を過ごす。ある時、蛍は涙ぐみ、「どうしたの?」と問う下田に「わかんない。シモダさんのそばにいと、なんか...ほっとして。」と言う(第4巻、pp. 91-82)。そして次の機会には「好きになってもいい? 寄りかかってもいい?」と蛍は下田に求め、下田はそれを受け入れる。アリストテレスが指摘するとおり、彼らは快さを共有し、それはひいては善を共有することになる。

5. 『ジュリエットの卵』の結末——蛍は何を意志したか

まず、物語の結末を概観しておこう。蛍と水の関係を知ったことによって母は錯乱状態となり、千葉の蛍のアパートに現れ、精神科に入院することになる。そして水は蛍にこう告げる。「むかえに行かなきゃ。母ちゃん連れて金沢に帰る。そうするのが一番いいだろう? 蛍にも」「...ミナトは?」と問う蛍に、さらにこう言う。「二度とおまえに会いたくない。それだけだ。母ちゃんのはじめから俺しか産まなかった。おまえはいなかった。そうしよう。俺達が別れるってのは、そういうことだ。」(第4巻、pp. 134-136) こうして二人の関係は断絶する。仕事のために髪を切った蛍は、水と見分けがつかなくなり、さらに言動も水を真似るようになる。ここで自己の存在自体を水から否定された蛍のアイデンティティが揺らぎ始める。

彼らの母は退院の目処が立たず、水は母に付き添うために金沢で母が経営していたブティックを処分し、東京にとどまっている。そして、ある時、自分たちの父親について、水は母から事実を告げられる。

「蛍が、かーちゃんと同じ名前なら、当然、水は、俺の名前は、親父の名前なんじゃないの?」

「そうよ。おまえの名前は兄からいただい

13 モデルの仕事で初めて得た報酬で、蛍は春の献立をととのえる。それを下田にお裾分けしようとする。下田は留守で、部屋にいた彫刻科の学生、苦子が対応する。下田に片想いしている苦子はこれを拒絶して言う。「あなたキレイなもの。あなたもお兄さんも、キレイなもの。それだけで十分、私には毒なのよ...。」(第1巻、p. 162)。そして蛍は涙することとなる。また、モデルの現場スタッフ達が次々と蛍を食事に誘うが、彼らのことを蛍は「あの人達、醜いんだもの。」(第4巻、p. 176)と言い切る。

たのよ。]

「...あ、兄って誰の...。かーちゃん、悪いけどもう一回いってくんないか？俺、今、とんでもないこときいた気がするんだよ。なあ、水って、誰の名前なんだよ」「ミナト？」

「誰の名前だ!？」

「... 蛍の、自慢の兄でした」(第5巻、pp. 26-28)

すなわち、水と蛍の父母もまた水と蛍という同じ名前であり、両親の近親相姦の結果として生まれたのが、水と蛍である¹⁴。上の言葉の前に、母は「何故、私達の恋は誰にも祝福されなかったのか。二人で死んだはずだったのに、何故、私だけがこの世に戻されたのか」(第5巻、p. 25)と嘆く。ここから、おそらく両親は双子が生まれた後に心中をはかり、母親だけが生き残ったのだろうと推測される。

その後、母親は隠し溜めていた睡眠薬のオーバードーズによって自殺し、葬儀の際に二人は再会する。そして共に向かった水のアパートで、彼は蛍を強姦する。ここで二人の間に初めて性的関係が発生する。実のところ、蛍に執着し依存するのは水の方であった。彼はさまざまな女性と関係をもったが、「実をいうと、俺の目には、どの女も皆、同じに見え

るだけだね。」(第3巻、p. 169 下線部は原文では傍点)、「今まで、どうでもいい女しか抱いたことがないんだ。どうでもいい奴としかできないんだ。」(第4巻、p. 114)と語っている。水にとって「どうでもいい奴」ではない相手は、蛍しかいなかった。しかし、それはタブーである。それを自ら侵犯してしまった水は袋小路に陥り、眠る蛍の首を絞め、殺そうとする。目覚めた蛍は「どうして？そんなつもりだったの？」と問い、水は逆に問い返す。「じゃあ、おまえはどういうつもりだったんだよ。いってみな。いえ!!」。

そして蛍は答える。「私達、もう他人なのよ。ねてしまったら終わりなの。」そして、「実らない卵をあたためつづける不幸が、私達の絆だったのだから。」¹⁵(第5巻、pp. 164-166)と言う。すなわち、彼らの関係は近親相姦のタブーのもとで、性的関係をもたないことを条件としてのみ成立し、均衡が保たれていた特殊な関係であった。その絆が切れてしまえば、二人は単なる男女として、すなわち、ただの他人としてしか存在しえない。

仕事のための電話をかけようとする蛍に、なぜそんなに平然としていられるのかと問う。すると、蛍は「女だから」¹⁶と答える。水は包丁で電話線を切断し、その刃先を蛍に突きつけ、「いつだっておまえの望むようにしてきたのに、どうしてシモダの方がいいんだよ。ど

14 この物語設定に対して、吉野自身はインタビューでこう答えている。「まず、仲のいい男と女の双子の話を描こうというのがあって、彼らが異様なまでに仲良くなる環境ってどういうのかな？と考えると、一般に女の子は父親と仲良くしちゃうので、じゃあお父さんを排除しよう。そして母親が残るわけですけど、母親だけで子どもができたり育てられたりはしないので、お祖父ちゃんやお祖母ちゃんが育てたのか、とか考えて、母親が呪いを持っていることにするのがおもしろいかなということであんな風になってしまった。」(「写真の中の母、それを見る娘」、『ユリイカ』、「特集 母と娘の物語—母/娘という呪い」、2008年、青土社、p. 99)

15 「卵」はタイトルとしてとられている通り、全編を通じたモチーフとなっている(各話の冒頭で、毎回異なる卵のイラストと、内容に即したサブタイトルがつけられている)。

16 本作品を最初に読んだ時から、この台詞の意味は謎だった。吉野自身は、第5巻のメッセージで「『ジュリエットの卵』というタイトルは、“真に女性的なもの”のイメージでつけました。」と述べている。単に「女性は男性より精神的に強靱である」という意味なのか、それとも「女性はやがて子を産む存在だから生きなければならない」という意味なのかといろいろと考えてはみたが、依然としてその具体的な意味を理解することはできない。この点は課題として残したい。

こがいいんだよ。」と詰問する（第5巻、p. 177）。蛍は「ミナトを愛してる。だからこそ下田さんが必要なの。」と答える。そして続ける。「蛍は、下田さんに会って、はじめて生命を美しいと思ったの。水、生命は、世界は、ただそれだけで美しいのよ。」（第5巻、pp. 161-162）。

しかし、水は蛍を突き飛ばし、「俺にはわからねえ。おまえと違って審美眼がないからな。おまえ以外のものならいらぬんだ。おまえがないなら、世界なんか、世界なんかなくてもいいんだ。」と、蛍の制止に耳をかさず頸動脈を掻き切って自殺する。

ひとり残された蛍は水を抱きしめ「水は蛍の運命、下田さんは蛍の意志」と内省する¹⁷（第5巻、p.95）。蛍のこの言葉は、まさにフランクファートの「愛は意志作用的である」という主張と重なる。蛍は水と下田を天秤にかけ、下田を選択したわけではない。そうではなく、自ら下田に魅了され、自発的に下田と共に生きることを意志したのである。

茫然自失となった蛍は水の後を追おうと包丁を手に取るが、心の中では「シモダさん、シモダさん、ミナトを助けて。私達をここから出して。下田さん！！」と強く念じる。その時、「日の丸」が目の前に現れる。連絡がとれない蛍を探して、アパートの住所を知っていた小夏とともに下田が駆けつけてきたの

だ。蛍は涙をこぼしながら「日の丸」を強く抱きしめる。

この物語は、蛍のモノローグで幕を閉じる。

「水、世界は美しいのよ。生命はただそれだけで美しいの。蛍はそれを信じて、自分を信じて、今しばらく世界をみつめていたいの。水、蛍の声を聞いて。水、きこえてる？ 私達もう一度生まれる事が出来るわね？」¹⁸（第5巻、pp. 201-205）

18年間、蛍にとって「汚れている」あるいは「醜い」ものでしかなかった世界は、下田によって初めて美しいものと蛍の目に映るようになった¹⁹。それは彼女が他者へと目を開かれ、それによって世界へ肯定的な態度をもつようになったからである。そして、こうした世界観の変化から、彼女は変貌し、自律的に決定し、自発的に自分の人生を生きていくことを選んだのである。

6. むすびに

最後に、本稿の内容をまとめておこう。次に、他者との間の愛の本質とはどのようなものであるかを考察した。本稿では若い女性の例をとりあげたが、これは別に若者に限ったことでも、女性に限定されるものでもない。

17 二人の元へと共に向かう小夏に、下田は「いおうと思っていることがあるから。」（第5巻、p. 188）と言う。下田はイタリアから来日した著名な彫刻家に目をかけられ、留学を勧められていた。ここでの「いおうと思っていること」とは、蛍にイタリア留学に同行してほしいということである。下田の意志もまた、蛍へと向けられていた。

18 実は、この最後の言葉の意味もよくわからないままである。「もう一度生まれる」とは具体的にどのようなことを指すのかが不明だからである。

19 余談であるが、本稿執筆の動機を説明しておきたい。『ジュリエットの卵』はわたしが大学生の頃に連載が始まり、リアルタイムで読んできた。本作はわたしが最も好きな吉野作品であり、何度か論文にしようと考えていたが、哲学論文としてどのようにアプローチすべきなのかを何年も決めかねていた。そして、今年の6月、歌舞伎座で『桜姫東文章』を観ていた時も、このことを考えていた。四世鶴屋南北原作のこの歌舞伎作品は複雑怪奇な因縁を描いており、粗筋は省略するが、主要な二人の役者がそれぞれ二役を演じる。物語の最後で、自分の愛する夫が父と弟を殺し、家宝を奪った張本人であることを知った桜姫は、夫と子供を容赦なく刺殺して家宝を取り戻し、お家復興を果たす。因縁を断ち切って自らの人生を変えていく桜姫の姿と蛍の姿が重なって見えたことにより、本稿の骨子が定まった。

よりよい生を望む人であるなら、他者との関係を通じて自らを省み、考え、自律的な意志をもち、実践へと繋げていくことが重要なのではないかと思われる。

他者や愛の本性については、概観するにとどまり、まだ論じるべきことがあるのだが、次の機会を待ちたい。

【文献】

アリストテレス『ニコマコス倫理学』、下巻、高田三郎（訳）、岩波文庫、1973年。

永井均（2000）、『マンガは哲学する』、講談社。

プラトン、『饗宴』、久保勉（訳）、岩波文庫、1952年。

吉野朔実（1985-1987）、『少年は荒野をめざす』、全6巻、集英社、

————（1988-1989）、『ジュリエットの卵』、全5巻、集英社。

————（1993-1994）、『ECCENTRICS』、全4巻、集英社。

Frankfurt, Harry, G. (1999), “Autonomy, Necessity, and Love”, in *Necessity, Volition, and Love*, Cambridge University Press, pp. 129-141.

Velleman, David, J. (2015), “Beyond Price”, in *Beyond Price—Essays on Birth and Death*, Open Book Publishers.